
乙女三銃士

黒鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乙女三銃士

【Nコード】

N0327V

【作者名】

黒鳥

【あらすじ】

高校の剣道で全国一位に上り詰めた後、とあることをきっかけにすぐに辞めてしまった主人公ダン（十七歳）は目が覚めた時、何のきっかけもなく、過去のフランスへとタイムスリップしていた。その世界で自分はこういうわけかダルダニャンという人物として認識されていた。

そしてさらにおかしなことに、その過去の世界は何故か女性の地位が高く、男性は下として見られており、あの有名な三銃士は男で

はなく女性へとなっていた。

不思議な世界に戸惑いながらもダンは元の世界へと戻るため、一度は捨てたものを再びその手に取り立ち上がる。

三銃士、文化の物語が今始まる。

主な登場人物紹介（前書き）

そろそろキャラをはっきりさせときたいので、主に登場する人のみを出しています。

主な登場人物紹介

瀬川^{セガワ} 壇^{ダン} 17才

この物語の主人公で、剣道全国一位の実力者であるが、とあることをきっかけに辞めてしまう。その後、何のきっかけもなしにタイムスリップしてからというものの色々与人してダメになっていく感が見られる。

レイヤ・アトス 18才

三銃士のリーダー的存在でいつも冷静沈着で過去に何かあるらしく滅多に笑わない。

イリヤ・アラミス 16才

天然なところがあるが、勘がいい。いつか世界中を旅したいという夢を持つ。

ティファ・ポルトス 17才

恋とおしゃれに命を賭け、見栄っ張りの一面もある。簡単に言うとツンデレである。

ロシユフオール 18才

左目に眼帯をしており、性別は男女？枢機卿の腹心であり、伯爵ダンのライバルとなる。

主な登場人物紹介（後書き）

これを書いても分かりづらいと思いますが、その辺りは気合いで頑張ろうと思います。

プロローグ（前書き）

かなり久しぶりの投稿です。
十割気合いで書いた小説です。

プロローグ

「ダルタニヤン、首都パリに出て自分の勇気を試し、将来を切り開きなさい」

「は？」

気がつくとも変わった衣服を着たおばさんがなんか言ってきた。てか、ダルタニヤンって誰？あんだ誰？

「ダルタニヤン、私から貴方に贈る物が四つある」

「はい？」

いや待てよ、まだおばさんがなんか言ってるよ、おい。……て、あれ、今俺に話しかけてるの？そしてダルタニヤンって何？全く事態を飲み込めないが、とにかくおばさんに合わせることにした。

「すみません、おばさん」

「ちよ、誰がおばさんですか！母親に向かってなんて口を利くのです」

「えっ母親？冗談だろ……」

「ダルタニヤン。先程から貴方おかしわよ、まったく実の母親をなんだと思っているの」

「いや、まず俺はダルタニヤンじゃ

」

とそこまで言っただけで。不意に、なんのきっかけもなく理解した。

(あ、これ夢だ。この状況どう考えても夢だ)

確信は持てないがきつとそうだ。いやあ、気付くときは、気づくもんだな。そうかそうか。やけに展開が急すぎるというか強引だと思っただけ、これ夢か。普段は夢見るにしても、はっきりしていないから、ちょい焦ったわ。まあ取り合えずお決まりとして頬をつねつての最終確認でも

「いてっ！……えっ！これ……夢……じゃない？……」

「さつきから何をぶつぶつと言っているの？ダルタニヤン」

なんか俺の母親とかめかしているおばさんがこっち見ている。OK OK、取り合えず落ち着いて状況を整理しようじゃないか。ええっと……まずあのおばさんが母親で、俺がその息子のダルタニヤンということになっていて、今俺はどこかに旅立とうとしている設定と考えていいのかな。見れば、俺もおばさんと似た変な服を着ているし大体はあっているだろう。やれやれ、仕方ない、今は少しでも情報が欲しいし、それらしく振る舞ったほうが利口だな

「いえ、なんでもありませんよ母上。どうぞ私に気を使わず続けてください」

「あら、そう……じゃあ一つ目に贈る物は、うちの馬よ」

俺の迫真の演技によりどうにか誤魔化せたようだが、そう言っておばさん(母親)がどこからか連れてきたというより出したのは、

どう鼻屑目に見てもこれ本当に馬か？と言いたくなるほどの滑稽な馬だった。まずどっから出てきた！

「この馬は、この家で生まれ、この家で育ったのだから、貴方もさぞ可愛く思っているでしょう」

いや……全然知らないんですけど、貰うにしても、もうちょっとかっこいい馬がよかったんだが、ここで口をはさんでも話が進まないし、やむなく黙る。

「二つ目は、お金よ」

「まじー！」

これには流石に身を乗り出して喜んだ。なんに關しても、金が貰えるとなると先程までブルーであったテンションも上がってくる。

「ここに15エキユあるわ。これで全部よ」

それを見た瞬間身を乗り出したまま。前のめりに転びそうになった。【エキユ】という金の単位は全く知らんが、けして大金ではないことは一目で分かった。「もつと出せやくそババア！」なんて流石に言えないし、ここはやはり沈黙を守ることにした。

「三つ目は、私の剣よ」

「！」

剣という単語が耳に入った瞬間、俺の頭にあの時の映像が脳裏に鮮明に蘇ってきた。屈辱、怒り、嫌悪、絶望、憎しみといったあら

ゆる負の感情頭の中を駆け巡り、腹の底からドス黒い感情が沸き上がるのをギリギリのところで押さえながら、なんとか表情だけでも平静を保とうとする。

そんな俺の心境におばさんは気づいた様子もなく取り出したのは、初めて見る形の剣だった。そうだな……形だけで言うトレイピアに刃が付いている感じと言えば分かりやすいだろうか。とにかく日本にある刀とはまるっきり違う物だった。

「四つ目は、教訓よ。ダルタニヤンよくお聞き、貴方は、男の身でこの世の中出世するのは難しいかもしれないけども自分に誇りを持ちなさい。そして家名を汚してはいけません。国王陛下と枢機卿殿下、それに近衛銃士隊のトレヴィル公のお三人には敬意を払い、この

初めの言葉だけ少し引つ掛かるところがあったが、後の話の意味はまったく分からん、というより面倒だったから適当に聞き流したが、簡単に言うとそのトレヴィル公とかいう奴のところに紹介状持って行って銃士として名をあげるとのことらしい。

「母上、私は、母上の言いつけを必ず守り、立派に名をあげてみせます。どうか見ていてください」

いい加減に演技も疲れてきたが我ながら上出来な振る舞いである。そして、おばさん（母親）から不細工な馬、僅かな金、そして“剣”と最悪の物を受け取り部屋を出ようとする。てか、今更だが部屋の中に馬っていいのか？

「それでは、庭に居るメイドのところに旅の挨拶に行きなさい。そして傷に効く、練り薬の作り方を教えてもらいなさい」

「へーい。じゃ、今から張り切っていつてきまーす」

「貴方、急になんて口の聞き方を」

最後はいい加減に演技をやめ、テキトーにおばさんをあしらって今度こそ部屋を出る。

「さて、どうするかな……」

馬を連れて廊下をぶらぶらと歩く。取り合えずあのおばさんの言う通りにトレヴィル公のとかなんとかいう奴の所に行ってから俺の家を探しをしますか。うん、目的がはっきりするとやる気が出てきた。当然メイドの所に行く気なんて全然ありません。いや少しあるかな、一回ぐらい本物のメイドを見てみたかったりするし、だからといって迷子なのに寄り道なんてね〜

ふと気になることがあつて自分の持ち物確認する。不細工な馬はどうでもいい“剣”は論外。そしてどこの国のか分からない金……この金に彫つてあることが俺の予想通りなら……おつあつたあつた。

「これって……1…6…2…5年……1625年!……はあっ!うそおおおおお!?!」

2011年 俺 瀬川 壇（17才）はどうやら過去にタイムスリップしてしまったみたいです。

プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

まだまだ未熟なため駄目な箇所があったかもしれませんが、そこは大目に見てください。

それでは私の中で恒例となってきた次回予告　屋敷を主発したダンにライバル出現！そしてダンはとんでもない過ちをおかす。

第1話「男？女？」（前書き）

プロローグを読んでいた方はありがとうございます。
早速続きです。

第1話【男？女？】

あれから屋敷を出発し、フランス中央部近くにあるマンという街（後になって知ったのだが）にたどり着いた。そこまではよかつたんだが街を歩いていて途中で、俺の第六感の美少女レーダーが、宿屋らしき建物の前にいる女性の後ろ姿を補則した。彼女の後ろ姿を見た瞬間、何も考えれずにすたすと歩み寄り、俺は彼女に向けて親指をぐつと立てると

「貴女の永遠のナイト、ダンです。一緒にお茶でもどうですか？」

「んっ？」

素晴らしい声だ。小鳥のように優しく、透き通った声、なんて美しい声なんだろうか。長旅で疲れた心が癒されていくようだ。

彼女は、ゆっくりとこちらを振り返ると俺を地獄に突き落とす言葉を言った。

「……失礼だかな君、私は男だよ」

「えっ…………お、男だと!？」

美しくキメの細かい肌、人形のように精巧な顔の作り、太陽の光を反射して輝く黒髪。そして左目にある眼帯がまたいい!その容姿は俺から見たら、紛れもなく美少女の顔……それがまさか男だと、不覚だ。不覚だ。不覚不覚不覚不覚不覚不覚不覚不覚不覚不覚

我が人生の中で一生の不覚である。

この俺がまさか……お、男に向かってナンパしただと、許されざる行為だ。とてもではないが明日から学校に行けそうにない。いや、そもそも帰ることもできないが、とにかく俺は男をナンパしてしまった。しかも初だぞ！初！生まれて初めてのナンパ相手が男……やばい、救いようがなさ過ぎる。こつちに来てから俺の人間的なものが完全におかしくなってしまうている。

「生憎私は男だ。少年、貴様の目は節穴かい？」

完全に意気消沈している人間にさらに追い打ちですか。俺だってわざと間違えた訳じゃないのに、たいして年も変わらない相手に向かって少年扱いなんてふざけてやがるぜ。この場合、間違えた俺が完全に悪いのだが、むしろ謝るべきなのだが、頭に血が昇った俺にそんな判断をする冷静さはなかった。女じゃなければ遠慮はいらないぜ。俺は元女につかづかと歩み寄って胸ぐらを掴んだ。いや、掴もうとした。

が、それをわきで見ていた男の仲間。というより従者であるう者たちが己の主人を助けようと、どこからかこん棒やシャベルを借りだして、間に割って入って襲いかかってきた。

「わっ！きたねっ、はっ、よっ、あぶっ……げふっ」

流石に多勢に無勢で、後頭部に鈍器と思われる直撃をもらって膝から崩れ落ちる。

俺はそのまま、力なく、地面に倒れ込んだ。視界が霞でいきやがて何も見えなくなった。

「あの少年は、どうしている？」

美少女とも美少年見れる騎士が尋ねると、勘定場にいた主人は、騎士の出した宿賃を数えながら答えた。

「気絶したままです。取り合えず土間で手当てだけをして、今は、二階で休ませています。まったくんでもない小僧で。本当にご迷惑さまでございました」

騎士は、それを鼻で笑うと

「田舎者の猪だ。出会った私の運が悪かったということだろう」

それに対して主人は、申し訳なさそうに首を横に振る。

「目が覚めたら、すぐに叩き出してやりますよ。それにしても驚いたのがその田舎者の猪が、近衛銃士隊隊長トレヴィル様への手紙を持っていたことでございます」

若い騎士は、ずっと顔色を変え、その片目には刃物のような光が浮かび上がったが、それも一瞬で次の瞬間には元に戻り、宿屋の主人は、下を向いて金を数えていたため、騎士の顔の変化には気付かなかった。

「手当てをしている最中に懐から見つけたのでございますが、あんな田舎者が、何故、国王陛下直属の近衛銃士隊隊長トレヴィルあてのを……」

言いながら宿屋の主人が顔を上げた時には、もう若い騎士の姿はどこにもなかった。

「旦那様、あのお釣りがございますが」

宿屋の主人は大声で一回呼んでから、今度は小さな声で言った。

「お返事がないようであれば、チップとして頂戴いたしますが……」

返事がないことを確認すると主人は、素早く金を革袋に入れて懐にしまいこんで、主人はにっこりと笑うと、田舎者の少年の様子を見に、二階へと向かった。

時は同じくして二人の話題になっていた本人は丁度目覚めようとしていたのであった。

……ああ頭いてえ……。……。ん。どこ何処だ……。俺は誰だ？いや、別にそこまで深刻ではないですよ。別ににも忘れていませんから。

次第に意識がはつきりしはじめ、よっこらせと言いながらベッドを起き上がると、丁度やって来たらしい見覚えのないおっさんが、怒鳴りたててきた。

「あんた、早く出ていってくれないか。まったく大変な騒ぎを起こしてくれたもんだ、こっちは迷惑しているんだ。さあ、早く行つてくれ。あんたの持ち物は、台所の土間に置いてあるから、それをもつて早く」

おっさんがなんか言っている間に意識が覚醒し、ようやく先程にあった出来事を全部思いだした。

「くそっ、あの野郎」

未だ何か言っているおっさんを見無視して、俺は飛び上がるようにベットの跳ね起きると下に向かって駆け出した。おちおち寝てはいられない。あのキザ野郎を一発殴らないと気が済まないからな。

台所に出ると俺の美少女リーダー……俺の美少年リーダーが窓の向こうにいる騎士の姿を捕捉すると同時に窓へと走り寄る。

キザ野郎はちょうど話し中だったらしく、話している相手は間違いない女性である。だってドレス着てるし。た、多分女性だ。先程のこともあり自信がなくなってきたが、とにかく盗み聞きする趣味はないので台所をつき出て入り口から飛び出した。

「おい！てめえ、さつきはよくも」

会話中なのを見無視して二人の前へと鮮やかに躍り出ると、馬車に乗り込もうとしていた金髪の女性が、振り返ってこちらを魅了するような笑みを浮かべた。

「まあ、可愛い坊やね。ねえ坊や、お姉さんのペットにならない？」

「はい！喜んで、なんなら奴隷でも構いませんよ」

一瞬で即答し、気付けば彼女に膝をついていた。あれ？俺ってこんなキャラだっただけ？こっちに来てからの俺、人として駄目になった感があるのは気のせいだろうか。

そんなことを考えている間に俺の女王様………じゃなくて金髪の女性は馬車に乗っており、あのキザ野郎も自分の馬にまたがっていた。御者が、声を振り上げながら鞭をおろすと馬車はゆっくりと動きだし、同時にキザ野郎も馬に拍車をあてて走りだしやがった。

「次会うときは男と女を間違えんなよ少年、そしてトレヴィル公への手紙をなくさないように気を付けな」

あの野郎、最後まで人を馬鹿にしやがって、走ってでも追いかけるようかとも考えたが流石に無理だよな。……とそこまで考えてふと気付いた。

（そついや、何であいつ、手紙のことといいトレヴィル公のこと知ってるんだ）

慌て自分の服のポケットというポケットを探るが、手紙は見つからない、しかも他の荷物もないじゃないか。ちょ、本気でやばいんじゃない、体に冷や汗が浮かぶな……そこで先程、主人が言っていたことを思いだし、急いで台所へと駆け戻る。

「俺の荷物は」と……お、あつた。あつた」

思いの外簡単に見つかったな。ちゃんと手紙もあるしな、ん？手紙が開けられてるけど、まっいつか。

こつというのはポジティブ精神が大事なのだよ君。俺はそのまま荷物を身に付けると、パリに向けて足を進めた。

蛇足だがあの馬は売ったぞ。見た目気持ち悪いし。

第1話【男？女？】（後書き）

今回も三銃士出てこないやないかーと思われている方もおると思われます。

すいません。次出しますので勘弁してください。（自分でハードルを上げていく）

そして次回予告　トレヴィル公の元へと向かうダンについて会いが訪れる。今度こそ男か？女か？

第2話【3つの決闘】（前書き）

今回はハッスルして多く書きました。

三銃士も少々出てきますのでよろしくお願いします。

第2話【3つの決闘】

一日掛けて、何の問題もなく、パリに辿り着いたおれは……いや本当ですよ。べ、べつに途中で迷子になったりしてないんだからね。

……こほん、まあそれは置いてだ、俺は今トレヴィル公の館の前にいる。展開早すぎだろ！と思われているだろうが、そこらへんはほら、あれだ、大人の事情だよ。別に話すのが面倒臭いとか恥ずかしくないことがあったから跳ばしたというわけでないからな。

では、仕切り直してもう一度言おう。俺は、トレヴィル公の館の前にいるのだが……めちゃくちゃ入りづらいですよこれが、なんか怖い顔した門番の人がいるし、想像してみるよ。友達から仮装パーティーとやろうぜって言うから、コスプレ（何のコスプレかは想像にお任せする）してから会場に行ってみると、みんな私服だった状況を想像しろ！そうだ！今の俺は、まさにその状態なんだよ！行きづらんだよ、そこで、普通に「来たぜ！」って顔を出せるか！？くそ、誰だよそもそも仮装パーティーとかしようとか言った奴。そうだ中島だ。あいつのせいで俺は、俺は……う、うわああああ……ふう、話が逸れた。落ち着け俺、この話は忘れよう。ようするに入りづらんだよ。しかし、このままではらちがあかない……よし、行こう。俺なら行ける。いや俺だからこそ行ける。そうと決まれば早速突撃だ！

「……ええつと、トレヴィル公に面会が、し、したいのですが、入ってよろしいですか？こちらに紹介状もあります」

「あ、それなら中に入って真っ直ぐに進み階段を上がって、控えの

間に入ってお待ち下さい。良ければお連れいたしますよ」

「い、いえ大丈夫ですよ。困ったら中に居る人に聞きますから」

ふう、第一関門はなんとか突破だ。かなり固かった気がするが問題なかったから気にしないぜ。そして、門番の人は思ったよりも親切だった。

中に入るとそこには、広い庭があった。また、そこには、武装し、青い制服を着た女性の銃士が五、六十人ぐらい立っていて、一斉にこつちを振り向いてきた。

「おおー！」

これにはかなりびびった。つうか普通に怖いし。男ならこういうことも慣れっこなんだが、女からだどリアルで怖い。とにかく少しでも早くここを離れるべく、小走りでその間を通り抜ける。……何故回り込まないのかって？だって間を通るしか他に道ないもん。

背中を射抜くような視線を振り切り、廊下を進んで行くと控えの間っぽい部屋に辿り着いた。他に人が沢山いるからおそらくそうだろう。それ以外に根拠なし。

着いたら後はただひたすら待つだけだな。しかし、この時間が一番緊張するんだよ。この状態を例えるならば、そうだな……学校での歌のテストの順番を待つ感覚って言ったら分かるかな。

二、三分もすると、ここの執事らしき人に呼ばれた。いよいよその時が来たようだ。

ガチガチに緊張しながらも部屋の中へと入り、四十代ほどの女性を確認して、入り口で深くおじぎした。先に言っとくが俺は熟女好きではないからな。

「私の名は、ダルダニャンと申します。タルプの生まれの者です。ここに父から手紙を預かってきております」

なんとか嘸まずに言えた。ここで、「失礼、嘸みました」なんてなりたくないからな、時前に考えといてよかった。

トレヴィル公は受け取った手紙に目を通すと少々厳しい表情で俺を見た。あれ？なんか俺不味いことでもした？

冷や汗が出るなかトレヴィル公が初めて口を開いた。

「手紙の封印が破れています、私が読む前に、貴方が読んだのかしら？」

俺は、全力で首を横に降り、疑いを晴らすべく、先日のマンの宿屋で起こったことをすべて話した。

話を聞いていくうちにトレヴィル公は次第に真剣な顔つきになり、話を聞き終わると再びその口を開いた。

「貴方が会ったその相手は眼帯をしていませんでしたか？」

その質問に俺は無言で頷いた。どうやら、あのキザ野郎のことを知っているようだ。

「あいつは何者なんです か？できれば教えてくれませんか」

「ロシュフォール 彼にどういう用件があるか知りませんが、戦いを申し込 むつもりならやめときなさい、貴方ではまだ彼には勝てないでしょうから」

そんなことは言われなくても分かっていた。初めて会った時から、奴がただ者ではないことぐらいは百も承知だ。ただどこで引き下がったら、男が廃るってもんだ。

俺の表情から諦めきれないことに気付いたのであろうこちらが先に言う前にトレヴィル公がそれを制する。

「彼に勝ちたいのは分かりますが、それより君は、自分の出世について考えたほうがよいでしょう。貴方の母君は、貴方が近衛銃士隊に入ることを望んでおります。そのために戦争で三、四回手柄をたてるか、別の隊で二年ほど勤めなければ行けません、どうですか」

当然答えはNOである。今の俺にそんなことをしている時間はない。あつたとしてもやる気がない。ロシュフォールの野郎を一発殴ってから帰る方法を探す。だが、今ここで断るのも得策ではないのも確かである。ここでなら少なくとも情報が集まりやすい。はてはて、どうしたものか……

ぼんやりと窓の方に目を向けて何気なく通りを見下ろすと、そこには何の偶然かあのロシュフォールの姿を見つけた。

「あの野郎ここで会ったが百年目だ」

呟きながら俺は、椅子を蹴るように立ち上がって出入口を蹴り開

けて猛然と外へ駆け出した。

俺は階段を雪崩の如く駆け降り、先程の女銃士達を押し退けて、外に出ようとした時、丁度入ってきた黒髪の銃士の肩にぶつかってしまった。

「すまない、急いでいるんだ」

軽く謝り、そのまま行き過ぎようとした瞬間、腕を捕まれた。

「急いでいたらからといってまともに謝罪も出来ないのかしら、でも本当に急いでいるみたいね、なら後で貴方に礼儀作法というものを教えてあげましょう」

「ああ、分かった。時間と場所は？」

「カルム・デシヨー修道院で、時間は正午」

「分かった。分かった」

そう返してから、改めて外へと飛び出ると外には門番と話している金髪の銃士がいたが、気にせずとその間を通り抜けようとした。

抜けようとしたが、その瞬間に銃士の長い外套が風に煽られて膨らみ、外套の中に巻き込まれた。

「なに、どうしたの」

銃士は、大声で怒鳴っているようだが、俺の方は俺の方で早く外に出るべくもがいたが、逆に外套はますます体に巻き付いてきた。

「あんた、早く出なさい よ!……あつ、ちょ、ちょっと変なこと触らないで よ」

そんなこと言われても俺の方も出るのに必死である。先程から何やら好ましい不思議な感触が手に伝わってきているが今は、急いでいるため気にしてられない。

「ああ、くそつ、悪いが外套を脱いでくれないか。それが一番早い」

銃士は、ぶつぶつと言いながら、ようやく外套を脱いだ。はあ……新鮮な空気だ。ほっと息をつく、銃士の方に向き直る。

銃士は顔を耳まで真っ赤に染め、両腕を胸の前で交差させてこちらを殺気のコもった目で睨んでいた。

ああ、なるほど、ようやく合点がいった。さっき手に当たってたのって“あれね”勿体ないもつと堪能すればよかった。じゃなくて、もしかして今、俺不味い状況なんじゃね。こういうときの回避方法ってどうすれば……

「ええつと……ご馳走様でしたっ!」

「何でそうなるのよ!人の胸を触っておいて、貴方、許せない。決闘よ、決闘。一時に、リユクサンブル宮殿の裏に来なさい。来なかったら……殺す。分かった」

とうとう怒りが爆発したらしく、一気に捲し立ててくる。俺は俺でその剣幕に全力で頷くしかなかった。頷かなければその場で斬り殺されそうな勢いだった。

それだけ言うと、金髪の銃士は背中を向けて去っていく。俺もこれ以上ここで時間を消費するわけにはいかず、表通りへと走り出す。既にそこには、ロシユフォールの姿はなく、当てずっぽうで走り回ったが、結局奴を見つけることが出来なかった。

道を引き返すにつれ、次第にさっきまでであった熱が覚めていく、トレヴィル公の話の途中に部屋を飛び出したり、人にぶつかったり、最後のは……うん、俺のせいではない、風が悪いんだ。風が。後の二人に関しては決闘の約束までしてしまった。悪いことをしてしまった感がある。この場合、フラグができたと喜ぶべきか、自分の命の心配をするべきか。

色々と不安ではあったが、なるようになるさ、こういつ時こそ余裕を持たなきゃな。

そう思いながら、歩いていると、前方で、歩きながら話している四人の銃士が目に入った。やはりここでは……いや、この世界では、男の銃士はいないようだ。それとも少なすぎるだけか。

その時、中の一人が話ながらポケットからハンカチを落とした。見た目は栗色の髪を短く揃えた俺とそう年も変わらないだろう少女だった。よし、ここは紳士的に……

「お嬢さん、ハンカチ、落としましたよ」

「およ？」

少々は他の銃士に先に行ってるように伝えるとこちらに向き直った。

「いやあ、ありがとう。きみ〱男にしては気が利くではないか〱」
感謝されているのは分かるのだが、どうも素直に喜べない。男つてそんなに下に見られてるのか。

「では俺はこれで失礼」

「ん？何やら急いでいるようだね〱なんか用事でもあるの？」

「いえ、少し前に二人から決闘を申し込まれたもので」

「二人からも決闘を申し込まれるなんて、君以外と凄腕だったりするのかな？」

「そんなことはないよ」

二つとも些細な事故のせいだな。

「またまたご謙遜を〱なら私も君に申しこんじゃおっかな〱」

「流石にそれは勘弁していただきたい。でも、デートの誘いなら受けるけどな」

これ以上の決闘があったら俺の体が、いや、命がもたん。

「あはは、君面白いね、私、君のこと気に入っちゃたかも。やっぱり決闘しようかな」

「え、いや、ちょっと」

「もう決定事項。異論は認めません。じゃあ他の人の決闘ことを考えて、二時に一回トレヴィル公の館の前に来てねー」

「いや、だから……」

最後まで言う前に、行ってしまった。元気というか変わった奴だ。

「三人と決闘か……さて、どうしたものか」

空を仰ぎながら呟いたが、当然それに答えてくれる者はなかった……

第2話【3つの決闘】（後書き）

今回はなかなか疲れました。しかし書き出したら止まらない。たまに熱くなる作者です。

今回は他に書くことがないので早速、次回予告　三人の銃士と決闘することになってしまったダンであったが、彼は己の剣を抜こうとしない、その訳は謎のまま。そしてそんなダン達の前に……

第3話【決闘の行方】（前書き）

三銃士を書いてて思いましたが、こういう作品は意外と難しいものと実感した作者でした。

第3話【決闘の行方】

カラム・デシヨアの修道院は、野原の真ん中に建っており、そのあたりは、決闘によく使われるばしょである。らしい。何せここに来るために何人もの人に聞いたからな。

相手は俺より先に来ていたようだ。あの時は、急いでいて気付かなかったが、なかなかの美人である。長身で、肩まで伸ばした黒髪に、スタイルのいい華奢な体をしている。雰囲気だけで言えば、ラノベで読んだ紅葉○弦のような人だった。

そして今気づいたが、注意深く観察すると、左腕が痛むのか左側をかばっているように見える。

「さっきは挨拶が出来なかったわね。私の名はレイヤ。レイヤ・アトス」

そう言っておじきをした。貴族のような上品な動きに、その美しさに俺は一瞬我を忘れ、固まってしまったり、慌ててこちらも同じようにおじぎをし返す。

「俺は、ダルタニヤン。ながいのでダンと呼んでくれ。さっきは本当にすまない。しかし、左手は大丈夫なんですか？」

レイヤは僅かに目を見開いて答えた。

「そう、気づいてたの……心配してくれてありがとう。でも、気持ちだけ、いただいとくわ。それにしても、私の友人二人に立ち会いを頼んだのに、全然、来る気配がないわね」

溜め息をつきながらレイヤは野原の向こうに視線を投げるも。その先には誰もいない。

「俺の方には、立会人はいないしな、こっちで名前を知っている知り合いと言ったら、トレヴィル公ぐらいしかいないし」

「あら、私の隊長を知っているの？」

「母の友人なんだ」

実際は全く知らないが、というよりも、母親ですらない。しかし、レイヤはそれで納得がいったように頷いた。

その時、後方で馬の蹄の音が響いた。どうやらレイヤの言っていた立会人が来たようだ。その証拠に目の前にいるレイヤは彼等に向かって手を振って合図を送っている。

「ようやく来たようね。あれが私の立会人よ」

「えっ!?!」

「あ、あんた。あん時の変態。何であんたがここにいんのよ!」

「あれ?まさかとは思ったけど、君だったのか。面白い偶然もあるんだね」

こちらへやって来る二人は、驚いたことに、後で決闘することとなっていた二人だった。

「あなた、二人を知っているの？」

レイヤがこちらに質問してきたので、俺は事情を説明した。全てを聞き終わるとレイヤは「なるほどね」と呟き、後ろの二人を前に連れ出して紹介する。

「こちらがティファ。ティファ・ポルトスよ」

そう言っただけでレイヤはまず金髪の銃士を方を指す。

「こちらがイリヤ。イリヤ・アラミス」

そう言っただけで、今度は反対の栗色の髪の銃士を指して言う。

紹介されたものの、俺は言葉を失っていた。それは他の二人も同様だった。

「それにしても驚いたわ。まさかあなた達まで彼と決闘することになったなんて。いったい何で、そんなことになったのかしら？」

「ちよつとしたことよ」

「私は面白そうだったか　らかな」

顔を赤らめるティファとは反対にイリヤは普通に答えた。ティファに限って　は、何も喋るなど鋭い視線を送ってきている。

「それじゃ後が詰まってることだし、始めましょう　か」

レイヤは前にいた二人を下がらせると傷を負った左側を庇うよう

に剣を抜き放つ。

しかし、俺は手が剣に延びてまではいるがそこから抜くことは出来なかった、いや、抜けなかった。体が抜こうと動こうとしても、心がそれを拒絶する。

俺のその行動にレイヤは怪訝そうに眉を潜めて言う。

「どうして剣を抜かないのかしら、それとも私を馬鹿にしているつもり」

「違う」そう言いたかったが、その口からすーすと息が漏れるだけだった。正直に言うと、今の状況から、逃げ出したかった。単純に戦うだけなら、他にもやり方があっただろうが、これは決闘だ。剣を抜かなければ始まらない。抜く。抜かない。抜く。抜かない。抜く抜かない抜く抜かない……頭の中で延々と繰り返される思考の連鎖。しかし、幸か不幸かそこに第三者が入ってきた。

「そこにいるのは銃士の方々か？」

声の方に視線を向けると、そちらには赤い制服を着た数人の女達が、馬に乗って近づいてくるところだった。イリヤが近づいて小声で言ってくる。

「まずいなあ、あれは、ジュサックと枢機卿の護衛士隊だよ」

見れば、レイヤは急いで剣をしまい、それを隠すようにティファがジュサック達の前に立ちふさがる。

「あら、ジュサック隊長ではないですか。先日は、レイヤ姉を大変

可愛がってくれださったそうではないですか、おかげで怪我を負い、苦勞しておりますのよ」

ジュサクと呼ばれた先頭の女は、ティファの言葉を気にした様子もなく、むしろその事が愉快そうに笑った。こいつ真正銘のSだよ。もう雰圍氣的にそうだろ。

「今、あなた方は、果たし合いをしていましたわね。決闘が禁止されていることはご存じでしょう？痛い目にあいたくなければ、大人しく私達についてくることをお勧めしますわ」

レイヤは俺の時とは打って変わった冷たい口調で答えた。

「残念ながら、私達は黙って付いて行くほど馬鹿じゃないの。もちろん、彼もね」

たちまち辺りに緊張が走る。て、えっ！俺も入ってんのか？まあ、確かに付いて行きたくないけどさ、でも仕方ないのか。決闘じゃないぶん気が楽なんだけど。

「こっちらは五人、あなた方は四人というのに、後悔しても知りませんわよ」

ティファがレイヤ、イリヤついでに俺に向かって口を開く。

「私達の勝利はとても薄いわ。レイヤ姉は怪我してるし、人数も劣ってる。でも引き下がる気はないわ。それが銃士なんだから」

二人はそれに黙って頷いている。その姿に俺もようやく決心がついた。剣を抜く気はしなかったが、それでも、全力で味方しよう

考えた。なんか正義の味方みたいでかつこいいしな。

「イリヤ。なんか他に武器はないか？」

「ん？その腰にある剣じゃ駄目なの？」

「ああ、出来れば理由は聞かないでほしい」

「そしたら、ええっと………あ、あつたあつた。これでいい？」

そう言っつてイリヤが渡してきたのは、棒。ではなく大根だった。それ、どっから出てきたんだ。

「……これでもいい俺にどうしろと」

「ちつつち、分かってないね、大根は健康にとても良いんだよ」

「いや、それは分かるよ。分かってますよ。でも今は武器が欲しいんだよ」

「大根も頑張ればあるいは武器になるかもしれない」

「なるわけないだろ、大根でどう頑張っても武器にはならないよ！俺はただ普通の武器が欲しいだけなんだよ！」

そう叫んでいる間に、イリヤはいつの間にか他の二人と同様に敵に対峙していた。えっ、本気でこれで戦えと、しかも残りの二人を俺に押し付けやがった。てか、片方はジュサクじゃないか。なんでこうなるんだよ。半ばやけくそになりながら今の怒りをぶつけるように片方の護衛士に打ちかかる。当然大根でだ。

だが護衛士はまさか相手が大根でかかって来るとは思わなかったらしく。反応が遅れ、俺はその隙だらけの頭に躊躇なく大根を叩き込んだ。女相手にそれはないだろと思われるが、勘違いしては困る。俺は美少女の味方であって、ブスには遠慮する理由は全くない。むしろ積極的に。

大根の直撃もろに受け、気絶したらしい“物体”をそこら辺に寝転がしたままジュサツクへと向き直る。よほど新鮮なのか人の頭を殴ったにも関わらず大根は奇跡的に無事である。その大根でジュサツクへと打ち込む。

先に自分の部下が倒されたところを見たためだろう。ジュサツクはこちらの攻めに対処して隙を見ては反撃をしようとしてくる。

だが、俺にとってはその動きはスロー映像のように感じた。遅い。遅すぎる。さらにこちらが攻撃のスピードを上げていくにつれ、ジュサツクの顔には焦りが窺える。今では防戦一方だった。

「くっ……あなた、一体……何者なん……です……」の

息を切らしながらジュサツクが問いかけてくる。今思うと、何者なんだろう。な、俺は確かに瀬川 壇であるが、周りからはダルクニヤンと認識されている。どちらが本当の俺なんだろうな。だがそれも帰る方法が見つければ分かることだろう。

「今のところは正義の味方かな」

今はそれだけでいい。それだけ分かれば充分だ。それだけ言っと、動きの遅くなつてジュサツクに籠手を打ち込む。

「くっ……」

その手から剣が落ち、そこを見逃さずに剣を後ろに蹴り飛ばすと、大根を突きつける。

「うう、参りましたわ」

潤んだ瞳でそう言うと未だ戦っている護衛士を呼び、気絶した仲間を連れてこちらに背を向ける。最後のジュサツクの顔は中々そそられた。

後ろからはレイヤ達が駆け寄ってきて称賛してくれた。

まだ帰る方法は見つかってないが、心から満足した。

これから先、うまくいきそうだ。俺はレイヤ達と共に、トレヴィール公の館へと引き返した。

第3話【決闘の行方】（後書き）

例によって書くことがないので次回予告　レイヤ、イリヤ、ティ
ファ達と行動することになったダン。そのダンの剣を抜かない理由と
は……（少し出ますが、まだはつきりとは書きませんので）

第4話【女王対面】（前書き）

すみません訳あつて短いです。

第4話【女王対面】

「ちょっと、落ち着きなさいよ」

ティファは普通に言うが、俺はそれどころではなかった。なに
も昨日ドンパチが女王の耳に入ったらしく、ぜひ会いたいと言うの
だ。たかが喧嘩みたいなものなのに、こんな事になるとは、想像も
つかず。緊張で胸のドキドキが止まらなかった。

「初めて女王陛下にお目にかかるんだから、しょうがないよ、そう
言うティファも女王陛下の前で転んだんだし」

イリヤが笑いながらフォローをいれてくれて、幾分楽になった。

そうしている間に、女王の部屋係がやって来た、俺は三人の一番
後ろについて部屋に足を踏み入れた。

「来たな、私の乱暴者達」

それが、女王の第一声だった。意外だったのが、女王が想像以上
に若かったことだ。大体であるが二十代なのは間違いないだろう。
その横にはトレヴィル公がいた。

「さあ、もっとこっちに来るがいい。少し叱ってあげるから」

叱ると言うわりには女王の声が明るい。三人はこの態度に慣れて
いるのか、すました顔をしていた。

「おや、その後ろにいるのが例の少年か、もっと前に来なさいな」

予想はついていたが、やっぱりこうなったか。ある程度決心はついていたから、別に問題ないが。

「なんだ。結構若いな。こいつが、本当にジュサックを倒したのか？」

「カユサックも。打ち負かしました」

トレヴィル公が付け足すと、女王は感心したように首をよこに振った。

「まったく最近の奴らは情けない奴らばかりでな、それに比べ貴様は男の身でありながら、その勇氣には恐れ入るよ」

そう言うと、女王は侍従に金貨を持ってこさせ、それをこちらへと投げ渡す。

「これは、私を満足させた感謝料だ」

「ありがとうございます」

今思うと、人に感謝されるのは初めてかもしれない。いや感謝されるだけならあるが、お礼のようなものを貰ったことまではなかった。なんだか照れる。

「近衛銃士隊に入るには、どこかの隊で見習いをする規則だ。とりあえず貴様をエサル侯爵の護衛隊に入れ、そこで腕を磨かせろ」

なんか勝手に話が進んでるんだが、相手が相手なため、俺は黙っ

て頷くしかなかった。一体、いつになったら俺は帰れるんだろうか。

それから数日後のことだ。俺が借りていた部屋の持ち主であるボナシユウが、訪ねてきた。

「じつは、折り入って、ご相談がありまして、よろしいでしょうか」
なんか分からないが、今俺頼られてる？頼られるってすげえ気分が良いな。例の如くそんな経験がない俺である。

「ああ、いいとも。いいとも。何でも言ってくれ」

椅子をすすめると、ボナシユウは口ごもりながらも、それから思いきったように口を開いた。

「実は、私の家内が、昨夜、誘拐されたのでございます」

おかしなことだが女が上位なこの世界でも男女の付き合いは存在した。それはさておき、どうやら思っていた深刻な話のようだ。

「詳しく話してくれないか」

「私の家内は、王妃様の侍女を務めております。家内の話では、王妃様と枢機卿様の間に揉め事を抱えております。それというのも、王妃様はイギリスのバッキンガム公爵様と相思相愛なのです。それを枢機卿様がお知りになり、王妃様を破滅させるべく、バッキンガム公爵に偽の手紙でおびき寄せしようとしたとか。家内は、王妃様の

命令を受けて動いておりましたから、枢機卿様の手下に捕まったのに違いありません」

成る程、大体は理解した。しかし、これは俺一人でどうにか出来るような話ではないようだ。話は本当だろうがまだ情報が少なすぎる。

「家内を誘拐した者については、見当がついています。名前までは存じませんが、家内が誘拐される前日に家の周りをうろついておりました。家内も言っていたので間違いありません」

「それで特徴は？」

「はい。黒髪で左に眼帯をしておりました」

まさか……いや間違いないだろう。ロシユフオールだ。まさかそんなことをしていたなんてな。

「あっ、あいつです！」

ボナシユウが指差して窓の方に視線を向けると、見間違えるはずがない。ロシユフオールだ。

急いで外に飛び出すも、そのときには、その姿は無かった。

「」

第4話【女王対面】（後書き）

個人的にももうちょっと三銃士の出番を増やしたいと思っています
が思うように書けないものです。

次回予告 誘拐された人を救うためダンは三銃士共に動き出す。

第5話「探偵と警察とスパイ」(前書き)

このあたりから、原作のと違ってきますので。

第5話「探偵と警察とスパイ」

「……ダン、只今帰還しました」

「あら、ダンお帰りなさい。ねえ、ご飯にする？お風呂にする？
そ・れ・と・も……」

「その流れは！？ま、まさか！あの！」

「……筋トレ？」

「何でそうなんだよ！おかしいだろ？そこは普通わ・た・し？って
言うべきだろ！疲れて帰ってきてるのに筋トレって鬼ですか！」

「でも、銃士たるもの体は鍛えとかないと」

「ああ、もういいよ、レイヤそれ以上言うな、おかげで余計つかれた。それより三人とももう戻って来たみたいだな。それで、そつちの方はどうだったんだ何か収穫あった？」

現在俺は、世話になっているおじさんのかみさんを助けるため。
レイサ、ティファ、イリスの三人に協力を要請し、かみさんをさら
った相手　ロシユフォールの行方を探しているのだが、残念なが
ら俺の方は収穫0である。そもそも素人の俺に聴き込みや、調査な
んでできる訳がない。

「私の方はなし。イリヤは？」

「残念だけど。私もないのだ」

「まじか？」

「まじか？って何よ。そう言うあんたはなんか有るの？」

「そりゃ、もちろん……………無いです」

それを言われると痛いんだが、それでも嘘だろ、おい、四人がかりで探して手がかり無しはやばいぞ。俺は期待の眼差しを込めて最後に残ったレイヤに向け

る。
レイヤは俺と同じ目をしたみんなを見ると、仕方ないといった感じで溜め息をつく。

「私が調べたかぎり、ロシュフォールをバスターユ牢獄付近の酒場でそれらしい人物を見たという証言が一つと、あと、枢機卿の館に出入りしているのを、他の銃士が見たらしいわ。目撃された時間は二つとも夜中よ」

流石はレイヤである。かなり有力な手がかりを出してくれる。

「じゃあここは、二手に別れた方が得策だな。片方が酒場に行つてもう片方が枢機卿の館で張り込みをしておく。ということで、いいか？」

「別に、それで構わないわ。それで、どっいうふうに別れるの？」

「それは……………」

「……自分でジャンケンで決めようと言いだして、なんだが、これは酷すぎる」

俺は一人で枢機卿の館で張り込みをしています。何故って、それは俺が、グーで。他がパー。これでお分かり頂けたらどうか？そうですよ、負けましたよ。一人ですよ。はあ……。

(うう)。寂しいよ、悲しいよ、辛いよ)

「ここにいたの？隣、失礼するわね」

「レ、レイヤ！？どうしてここに！」

メソメソしながら張り込んでいた俺の隣に腰かけたのは、ティファ達と一緒に居るはずのレイヤだった。

「さすがに、ダン一人じゃ可哀想と思ったから、来たのだけど、迷惑だったかしら？」

「いや、いや。迷惑じゃないってむしろ感謝感激だった」

慌て弁解すると、レイヤほんの少し口元を緩ませて笑ったように見えた気がしたが、気のせいかな？もう一度見ても、相変わらずの無表情。ほんとレイヤは笑わないなあ。

「それにダンには聞きたいこともあるしね」

「聞きたいこと？俺に？」

「そう、あなたに、あの 時、私達が決闘しようとした時。何故、あなたは、剣を抜かなかったの？」

その質問に俺は顔を強張らせた。いつか来るのは分かっていた。だが、いざ、聞かれると、どうしようもないくらい混乱する。本当のことを言うのか、 適当にはぐらかすか。だがこの場合、後者は許してくれないだろう。悩む俺に、レイヤはさらに追撃をかけてくる。

「あなたは剣を使わずに大根だけで二人も倒した。その一人は隊長だった。動きや構えがおかしかったけど、あれは、紛れもなく剣士の動きだった。それほどの腕を持ちながら、どうして、剣を拒むの？」

「……………」

そういえば、前にも同じようなことを言った奴がいたな。

『どうして剣道、やめちゃったの！』

そう言われて、俺は、あの時は、何て言ったけ……思い出せない。ただ、一つ覚えてることがある。俺は彼女を傷つけた。最悪なことを言ったんだ。だけど、なにを言ったかまでは思い出せない。

「言いたくなかったら、無理して言わなくていいわ、ただ、力を持つてるのに使わないことが許せないだけなの」

「……………すまん」

「別にいいわ、私も嫌なことを聞いてごめんなさい」

「……………」

なんだろ、すごく気まずい。何を言っているかわからない。話さなきゃとは思いつけど、口が動かない。そうしている内に。

「ビンゴ！来たわ」

た、助かった。顔を上げると、間違いない、ロシユフオールだ。今回ばかりは奴に感謝だ。

「当たりのようだし、今夜は一旦戻りましょう」

「あ、ああ」

それに頷き、立ち上がると闇夜に紛れて、家に戻った。

第5話【探偵と警察とスパイ】（後書き）

最近やたら寝落ちが多い作者です。

それはさておき、次回予告　遂にロシュフォールの行方を掴んだ
ダン。

潜入しようとするもまさかの事態が……

第6話【争いと潜入と救出】（前書き）

どうも、作者です。書いていて思うのですが、どねがどのキャラが分かりづらいです。

もうちょっとキャラを濃いめにするか検討中です。

今回はレイヤさんの出番が多いので、どうぞ！

第6話【争いと潜入と救出】

「では、私から作戦を説明しましょう。まず、枢機卿の館に潜入し、そこから可能な限り誰にも見つからないように、ターゲットを救出する。以上」

今回はイリヤが珍しく意見を出すか……

「それは、作戦と言えるのか」

作戦にしては、あまりにお粗末なものだ。だからといって他にまじな意見があると言われれば。当然ないわけで、否定はしないが。

「でも、流石に四人で行ったら、気付かれるわね。ここは二人が丁度いいんじゃないかしら」

いい加減な作戦にすかさずレイヤが補正をかける。まあそれが妥当だろう。

「それで誰が行くんか？元は俺が受けたことだから、その内の一人は俺がやるけど……」

「……なら、私もやる（わ）（よ）！」「」

「おおっ！」

びっくりした！。一瞬であった。俺がやると言った瞬間に三人が同時に答えたのだ。全く、人助けしたいのはわかるけど、そこまでやる気にならなくてもいいのにな。

「『ジャンケン、ポン!』」

そして、それぞれの思いが込められているであろう運命の右手の先にあつた結果は……

「また、二人きりね」

「あ、ああ、そうだな」

真夜中、枢機卿の館の前、俺に話し掛けているのは、戦いの勝者　レイヤである。つまり、他の二人は家で留守番である。

「それじゃ、行くわよ」

「そうだな」

それだけ言うと、お互い表情を引き締め、無言で正面玄関から忍び込む。

「そついや、どこに捕まってるのか分かるのか?」

小声でレイヤに尋ねる。今になってかみさんの居場所を知らないことに気づいた。が、レイヤはそれに慌てた様子もなく、小声で答えてくれた。

「捕まえた人は普通、出入口の近くに閉じ込めない。だからといって地下室なんか閉じ込められている可能性も低いわ。つまり、探

すなら客間のような場所、当然そこには、目印となる……」

「見張りがいるわけだ」

レイヤの言葉を引き継ぐ、言われてみれば確かにその通りだ。ここにいたのがレイヤでよかった。正直にその事を言うと、そつばを向いてしまった。あれ、なにか不味いことでも言ったのだろうか。

長い廊下をただひたすら進んで行くと、レイヤの予想通りに、見張りのような者がいる部屋を発見した。

「どつするっ？」

意見を求めると、レイヤは無言で任せてという風に頷くと、懐から筒の様な物を取り出す。

「……ふっ」

なんだそれ？と言っ前に、レイヤはそれを口許へと持っていき、息を吹く。

ヒュッという音と共に筒から何か吹き出され、慌てて何か飛んでいった方向を見れば、そこには先程までいた見張りが倒れていた。

「なあ、そ、それってまさか吹き矢？」

「ええ、針には即効性の麻痺毒が塗ってあるわ、もちろん、私が作ったね。おそらく、三十分は体が痺れて動けないわ」

「お前、まさか、いつもそんな持ち歩いているのか？」

「あら、よく言うじゃない、いい女には毒があるって」

「言葉の意味もその言葉自体間違ってるゆえに、日頃から、吹き矢を持ち歩いているのはお前くらいだ」

新事実発覚！レイヤは吹き矢を持ち歩いていた。銃士としてそれ、いいのかよ！色々と言いたいことはあったが、時間がない。これが、終わったら、レイヤには説教をしなければと誓いつつ、部屋へと入る。

「あ、あの、どちら様ですか？」

それが部屋にいたもの第一声だった。どうやら、この女性で間違いないようだ。それに、起きている。これは都合がいい。レイヤに見張りを任せつつ歩み寄り……

「私はダルタニヤン、貴女の主人に貴女を助けてほしいと、頼まれたものです。さあ、今の内に逃げましょう！」

「え、ええ」

急な出来事に頭が付いていってないようだが、こちらに従ってくれるようだ。

「……………」

あと、何故か背後から威圧感的なものを感じるのはいのせいだろつか。うん、気のせいだ。

「よし、こっちはOK。行くぞ、レイヤ」

「そうですね」

若干、棘のある言い方だった。この短時間で急に不機嫌になったようだ。

女はミステリー。

部屋を抜け出し、予想よりも簡単に屋敷を出た、俺達がかみさんを主人に送り届けるため、足を早めた。

第6話【争いと潜入と救出】（後書き）

書くことなし。

次回予告　主人のかみさんを無事助けたダン。しかし、それは新たな危機を呼び込む。次はティファのターン。

第7話【祝杯と発覚とまた事件】（前書き）

前書きというのは毎回考えるので大変です。だからと言って書かない訳にもいかないと悩んでしまいます。

愚痴はここまでにしときます。では本編をどうぞ！

第7話【祝杯と発覚とまた事件】

『乾杯〜！』

掛け声に合わせてカツンと四つのグラスが打ち合わされ、中の液体が僅かばかりに零れるが、俺を含め誰もそんなことは気にせず、中身に口をつける。ちなみに中身は、葡萄酒ぶどうしゅである。前だったら、未成年という理由で飲ませてもらえなかったが、ここにそれを咎める者はいない。

初めて口にした葡萄酒は不思議な味がした、グレープジュースに近いようで、別のように感じる。以外と飲みやすいし美味しい。じつくりと味わいながら、料理に舌鼓を打つ。

「なんか、拍子抜けするほどあっさり解決しちゃったわね」

ティファの言う通り、俺達が屋敷を抜け出した後、も、追っ手のような輩は現れず、無事にかみさんを主人の元まで連れていくことに成功した。そして、再び拉致されないように、レイヤがトレヴィル公に頼み、しばらくの間、二人を保護までしてもらっている。何から何まで上手くいった。逆に怖いくらいだ。

「でも、今回私達なんにもやってないよ〜」

拗ねたようにイリヤが愚痴る、でも、確かに、今回、二人は特に目立った働きをしていないしな。

「いや、でも、ほ、ほら、よく言うでしょ、一人の手柄はみんなの手柄って……」

イリヤに指摘され、あたふたと言葉を並べるティファを横目で見ながら、今回活躍したレイヤに視線を移すと、そこには、顔を赤くして呆けているレイヤの姿がそこにあつた。あ、あれ？レイヤさん？

試しに手を前で振ってみるも、反応がない。これはもしや、いやしかし……

「あゝああ、レイヤ姉、もう酔っちゃったんだ。相変わらずお酒弱いなあ」

「は？嘘だろ？葡萄酒を一口飲んだだけで酔うなんて、あるのかよ」

「こちらに気づいた、ティファがレイヤの様子を見て教えてくるが、俺にはとても信じられなかった。日頃の様子を見れば一番酒に強そうな人が一番に酔うってどうよ。」

「あ、あと、これ以上、レイヤ姉が飲まないようにしておいて」

「え、それって、どういうことだ？」

「「死ぬよ、私達が」」

そこまで言われると、逆に試してみたい衝動に駆られるが、今回は大人しく従うしかない。なに、機会はいつでもあるさ、次の機会に期待しながら、レイヤの前にあるグラスを回収して、こっそりと

……

「それで、あんたは、何こっそりと、それを飲もうとしているのか

しら？」

「だって捨てたら、勿体ないだろ？ だったら飲むしかないだろ」

「そしたら、か、か、間接キスになるじゃない！」

（（かわいい！））

間接キスぐらいで顔を真っ赤にするティファをイリヤと二人で暖かい目で見ながらなおも続ける。今度は違う手で。

「じゃあ、俺の代わりにお前が飲むか？」

グラスを差し出すと、未だ顔を真っ赤にしながら も、他に選択肢がなかったらしく、素直にグラスを受け取り中身を飲みを煽る。

「女同士での間接キスって微妙なエロスを感じるな」

「ぶっ！」

飲んだ瞬間見計らって言った俺の言葉に、ティファは思いつきり葡萄酒を吐き出して、げほげほとむせていた。やべえかなり面白い。だが、ふざけ過ぎたバチなのか、吐き出された葡萄酒を顔面に食らうこととなった。

「今のは完全にダンの自業自得だね」

イリヤが笑いながら、顔を拭いてくれて、それが終わると、改めてティファを見る。先程まで赤かった顔を一段と赤らめ、俺を睨み付けている。

「なに、あんたは、とんでめない事言うのよ」

「単純に面白い。あと、お前の恥ずかしがる姿がかわいいからな」

「っ！！！！！」

何に反応したのか、顔色が赤から紅に変わり（いったいどこまで赤くなるのだろうか）声にならない悲鳴を洩らし始める。

「ダンって、中々の女たらしだね」

「ん？なんの事だ？」

「それを自覚していないところもまた凄いよ」

イリヤがよく分からん事をいつているが、取り敢えず誉められて
いるのだろうか。

レイヤは早々と酔い潰れ、ティファは先程からへらあつと不気
味に笑っている。イリヤ睡魔に負けて現在は机に伏せて寝ている。
酷い有り様だなど思いつつも、とても、楽しく感じた。

だが、そんな楽しい時間は一瞬で砕け散った。

突然、扉が開き一人の者が入ってくる。完全に虚を付かれる形に
なったが、椅子を蹴飛ばしながら、侵入者に向き直る。隣では、テ
ィファも頭を切り替え同じように構えている。

「ふん、酒盛りの途中だったか、いかにもお前らしいな」

「貴様っ！」

「どつしてここが！」

侵入者の正体は、ロシユフオールだった。ここに奴が現れたのは驚いたが、相手から来たのであれば、俺にとっては好都合だ。

「おっと、待ちな、今日は別に貴様らを潰しに来たんじゃない、今日は貴様らに警告しに来たんだ」

「警告だと？」

まさか、かみさんを逃がしたのが、俺達とばれているのか？いや、現にばれているから奴がここに来ているのか。

「そんな意外そうな顔をするな、お前らが倒したと思っていた見張りの奴が、体が痺れながらもお前たちの事を見ていたんだ。まったく詰めが甘い」

横から非難の視線を感じるが、変えず言葉もない。

「本題に入ろう。話は簡単だ。これ以上、我々の邪魔をするな、万が一邪魔をした場合は……」

分かっているなとその目が告げている。その迫力に吞まれ、なんとも言えなかった。それはティファも同じなのか、横では動いている心配がまったくくない。

「警告したからな」

最後にそう告げると、ロシユフォールは無防備に背を向けるが、襲う気にもなれず、奴が出るまで二人は動けなかった。

第7話【祝杯と発覚とまた事件】（後書き）

大分キャラが固まってきた感があります。

皆さんはどのキャラが好きですか？と言っても、未だ出番が少ない、イリスは例えるならば少し仲の良いクラスメイトの印象しかないかもしれません。

次回予告　ロシュフォールに警告されたダン達。だが遂にこの二人がぶつかる（かもしれない）

今度はイリヤにも出番をあげたいです。

第8話【決意と決闘と驚愕】（前書き）

中途半端な時間帯ですみません。今回もどうぞお楽しみ下さい。

第8話【決意と決闘と驚愕】

……困った。実に困った。ロシユフォールが消えて、怒りやら、恐怖やらでそれを忘れるかのようにティファと酒を飲みまくったのだが、数分後にティファも潰れてしまったのである。

この部屋で意識があるのは俺しかない現状、無防備な状態の三人の美少女を前に、平然としていられる方がどうかしている。

先に潰れていた二人はティファの意識があるうちに、備え付けである、ベットに寝かしている。

(今なら……いやいや、落ち着け俺、いったい何を考えているんだ！だが少しだけなら……しかしっ！)

「何！う、腕が、勝手に動きやがる！？」

酔った勢いもあつてか、俺の意思に関係なく、腕が無防備なティファの胸へと延びていく。

そんな時……

「んっ……あいつの好きにさせないん……だから」

「……………」

いつの間にか、腕は止まっていた。いや既に触っちゃってるんだけど、前にも触った好ましい感触がてに伝わってるんだけど、今はそんなことは気にしていなかった。

ティファのちょっとした寝言が俺の考えを改めさせた。

「……仕方ないな」

そう言っつて、溜め息をつく。ほんとに仕方ない。彼女達のためなら、やっても良いかもいれないそう思えてきた。今回だけなら……

決心がつくと、最初に動きやすい格好に着替え、腰に“剣”を下げる。酔いざましに水を飲んで、部屋のドアに手をかけると。

「行くの？」

「……ああ」

先程から気付いていたから驚きはしない。また振り向きもしない。誰だかは分かっている。

「イリヤ。二人を頼んだぞ」

「私もいっちゃダメかな？」

「そこで俺がいいと、言うと思っているのか？」

当然だめだ。この後にある出来事にイリヤ達を巻き込むつもりはないし、見せるつもりもない。

「だよ、分かった。二人のことは任せて。でも、帰って来なきや呪うからね」

「……分かった。じゃあ、行ってくる」

イリヤの言葉にほんの少し笑い、一時の別れを告げて部屋を出た。

そいつはすぐに見つかった。カルム・デシヨアの修道院の野原。少し前にレイヤと決闘した場所だ。

(実際はやってないけど な)

そいつは、俺を待っていたかのようだった。いや、実際に待っていたのかもしれない。

「……来たか、決闘の礼儀として、貴様に名乗ってやる。ユーリ・ロシュフォールだ」

そう言っただけ　　ロシュフォールは腰の剣を抜き放ち構える。

俺の方も覚悟は出来ている。彼女達のために……いいや、違う。倒したい。ただ単純にあいつを倒したい。昔にも感じたことのない初めてと言っただけのいいほどの高揚感が体を包む。今なら“剣”を抜くの躊躇いはない。腰から月光に反射して光る銀色の刃物を抜き放つ。

「ダン。瀬川 壇だ」

敢えて奴に本来の名を言ったのかは、分からない。ただ奴には言っておきたかった。

感触を確かめるように柄を握り直す。この剣は片手でしか持てな

いようになつていた。昔のようには動けないだろうなと思ひながら右手で刀を正眼に構える。

「……………」

お互い無言。言葉など必要ない。奴も俺がここに来た理由を理解しているのだろう。

(なかなか動けないな)

打ち込む機会を探るが、隙がない、ロシユフォルもそれは同じなのか、動く気配がない。こちらが別の構えにすれば、相手もそれに合わせてくる。

その繰り返しを続けるうちに……

「ちえあっ!」

「らああっ!」

同じタイミングで気合いを放ち、前へと飛び出す。

丁度、中央で衝突し、斬撃がお互いの頬を掠める。だがそれでは止まらず、お互い剣を引き戻すと再び、剣を打ち込む。

斬線が交錯し、気合いの咆哮が衝突する。

鏢迫り合い。刃の向こうにはロシユフォルの顔がある。ここで僅かな差ができた。鏢迫り合いなど、多く経験したことのないロシユフォルに比べ、今のこの状態は俺が優勢だった。

引き籠手。相手を押し、その勢いで下がりながら、手首に向け降り下ろす。

「ちっ！妙な剣術を使う」

驚いたことにロシユフオーは強引にも、距離を詰め手首に当たるはずだったのを己の刃にぶつける。

こつなつてしまえば、こつちの剣に慣れていない俺が断然に不利だ。反撃する隙を付けず、防戦一方になる。

「」

(ダメもとでやってみるか)

成功するかは分からない、だが他に手が無いのも事実、片手では、昔出来ていたことの多くが限られてる。

だったら……

「ぶっ！」

息を吐きながら、すっと剣を伸ばして、ユーリの剣に合わせ、そのまま巻き取るように刃をからめ、空中へと跳ねとばした。

だが、自分の剣を跳ばされてもユーリの顔に焦りは無い、逆に素手で向かってくる。

そうなら困るのは、俺の方である。素手の奴相手に剣を振る

うわけにはいかない。下手をしたら殺してしまうかもしれない。
なら……

「いいだろう、いくらでも付き合っただけでやる！」

剣を後ろに放り投げ、ユーリを迎え撃つ、そこからはただの殴り
合いだ。

こちらが殴れば相手も殴り返す。こちらが蹴れば相手も蹴り返す。
もう、決闘もくそもない。

それが十分も続くと、流石に、意識が朦朧まごころとし、目が霞み、体が
鉛のように重い。だけど倒れない。ユーリもそれは同じなのだろう、
足下がふらつきながらもしっかりと立っている。

だが、これ以上続けるつもりはない。次で決める。こっちの意図
が伝わったのか、ユーリからの動きはない。

「負けた奴は、勝った方のの言葉に絶対服従だ」

「いいだろう」

ユーリがそれに頷く。勝ったら、確かめたいことができたしな。
先程殴り合ってる時に気づいたのだ。

やる気が出てくる。そうなれば、絶対勝つしかない。

「「うおおおおっ！」」

お互いが最後の雄叫びをあげ、走りながら、距離を見切る。一瞬
の狂いさえも許されない。超人的な集中力をもって可能とした攻撃

だった。

二人の距離がゼロになる瞬間、ユーリの拳が突き出されるのを視ながら、瞬時に体を下げる。

ユーリからは、俺が消えたように見えたかもしれない。足を踏みしめ、渾身の力をユーリの顎に叩き込む。

「はあはあ、終わったか……」

半分は賭けだった。少しでもタイミングを外したら、倒れていたのは俺の方だったかもしれない。

だが、今立っているのは間違いなく俺だ。目の前には、気絶か脳震盪でも起こしたか、大の字に倒れたユーリの姿がある。

「さあて、約束は守ってもらうぞ、これから楽しくなりそうだ」

聞こえているか分からないが、そんなのは関係ない。俺はこれからすることに、想像を膨らませた。

第8話【決意と決闘と驚愕】（後書き）

戦闘シーンを書くのは難しいです。

今回書いたのは他に比べ迫力がなかったかもしれませんが。これから精進していくのでよろしく願います。

次回予告　ロシュフォール改めユーリとの決闘？に勝利したダン。彼の秘密を知り、それを楽しみながら平和な日常を一時の間過ごす。

第9話【日常と欲と混沌】（前書き）

遅くなり、すいません。最近は色々と忙しいので、投稿はこのぐらいのペースになると思っていますので。

第9話【日常と欲と混沌】

青い空……白い雲……絶対服従のメイド……を眺める、この俺……なんと優雅な一時であろうか。

「おい、俺の紅茶はまだか？」

声を掛けられたメイドは肩をふるふると震わせながら、ぎこちない動作で紅茶を注いでいく。

「ど、どうぞ、ご主人……さ、ま」

顔をひきつらせながら、ティーカップを持ってきたのは、決闘で負けたユーリである。誤解しているだろうが、俺に“そんな”趣味はないからな。ユーリは真正銘の女だ。だから、こうしてメイドの衣装を着せている（黒と白を基調としたメイド服）。等の本人は、俺に女だと気付かれていないと思っっているらしく、俺の事を変な趣味の持ち主と思われているようだが、逆にその考えを利用して今後、色々楽しもうと思っている。

「貴様、俺をこんな格好にさせておいて、いつか必ず後悔させてやる」

「はいはい、じゃあ、次は掃除よろしくね」

後悔させてやる。と言いながらも、しっかりと言われたことをするユーリは本当に可愛い。正直、決闘の約束をここまで忠実に守ってくれるとは思わなかった。その事をユーリに聞くと、「約束は約束だ」だそう。そんな理由でここまでやるか？と思う。まったく

律儀な女である。初めてあったときは、男と思っていたので、うざい、死ねばいい、と思っていたが、女と分かったら、この態度が逆に可愛らしく見える。自分のことを“俺”というのがまた良い。

「……平和だ」

今になると、もう帰る方法探さなくていいか、と思えてくる。向こうに特にいい思い出があったわけではないし、レイヤ、ティファ、イリヤ、ユーリように可愛い女の子が、自分の回りにいるわけでもない。機械がないからと言ってそこまで不自由があるわけではない。なら、このままでいいだろうとそう思えてきたのである。

「ほら、その隅まだ埃があるぞ」

「わ、分かっている！」

だから今はただ楽しんでおこう、この世界を今の生活を。

コンコン

「ん？誰だ？」

レイヤ達ならノックはしないはずだよな、なら、また誰かからの頼まれ事かな？

「ユーリ、開けてやれ」

「ちっ！」

舌打ちしながらも、扉を開けてくれるユーリを微笑ましく見なが

ら、扉の方へと視線を移す。

「ダルトニヤン様でお間違いないですね」

「あ、ああ、そうだけと……」

「トレヴィル公からの使いのものです、手紙を預かっておりますので、お受け取りください」

「はあ……」

そういえば、最近はおつちの方に全く顔を出してないな、何かあったのかな？秘書顔の女から手紙を受け取り封を開ける。ユーリも内容が気になるらしく、上から覗き込む。この体制、普通は胸近っ！となるはずなんだが、ユーリのはさらしでも巻いているのかと思うほど（できればそう願いたい）平らだ。なので気にせず手紙に目を向ける。今更だが、何故か全て日本語となっているので読み書きは問題ない。

「時は来た。今こそ我らは立ち上がる。剣よ集え」

それだけである。全く意味がわからん。時は来たって何だよ。

「……戦争か」

「戦争？どこと？」

俺の疑問にユーリが答えてくれたが、どうもピンと来ない。

「そこまでは俺も知らない。国内、外国のどちらかだろうが、今

回はおそらく後者だろう」

「それって、やっぱり、スペインとかドイツなんかの周辺国？」

「そうとも限らないが、まあ基本はそうだろう、あと貴様、他人事のように言っているが、貴様も参加することになるのだぞ」

「それは、分かるんだけど……」

いきなり、戦争に参加されると言われても、今まで、そういうこととは無縁だったからな、自分の事のように思えないんだよな。

「ん？じゃあ、レイヤ達も……」

「当然、参加することになるだろうな」

「……そうか」

納得がいかないな。男性は全く戦わずに、代わりに女性が戦うなんて、どうかしてる。

「とにかく、一度行くしかないか、考えるのはそれからでも遅くないだろ」

「少し待て。私も行く」

「それなら、その箆笥の中を着ろ、流石に街中でメイドを連れていたら、俺の方が恥ずかしくなる」

「ほう、ならこのままで行くのも、ありだな」

「それだけは勘弁してください！」

全力で土下座する俺に満足したのか、ユーリは箆笥から着替え一式取ると、ようやく隣の部屋に移った。

「それで、他にも俺に何かあるんだろ？」

未だ出ていっていない、使いの者に向き直り声をかける。

「ええ、実は……」

「断る！そんなこと誰がするか」

話を全て聞き終わると、俺は迷うことなく言い捨てた。

「いいえ、貴方にはしてもらわなければ困ります。貴方ほどの腕の立つ人物はほとんどいませんから、もし、やらない場合は、レイヤ様が、ティファ様、またはイリヤ様にやってもらうことになりますけど」

「ちっ！最終的に人を脅迫か……」

「いえいえ、あくまでこれはお願いです」

なるほど、トレヴィル公もこっちの弱点を突いてくるな。俺も高く見られたもんだ。でも、こんな事を彼女達にはしてほしくないな。初めから俺には拒否権なしか。

「……分かった」

「ありがとうございます。トレヴィル公にはすぐ私から伝えますので、では、私はこれで」

出ていくその後ろ姿を憎しげに睨み付けるが、それで何かが変わるわけでもなく、脱力したようにベットに倒れ込む。

「面倒事を引き受けたようだな」

「……ユーリ、聞いてたのか」

視線だけそっちに向けると、男装姿のユーリが壁にもたれながら立っていた。

「それで、貴様はさっき言われた事を本当にやるつもりか？」

「断れるわけないだろ、あんなこと、彼奴等にやらせたくないしな」

レイヤ達にやらせるぐらいなら、俺がやったほうがまだだからな。だからと言って、このまま簡単に受けるつもりもない。

「文句は向こうでたっぷりと言うしな、では、行くとしますか」

俺は、よっこらせ、と言いながら立ち上がり、トレヴィル公の元へとユーリを連れながら向かうのであった。

第9話【日常と欲と混沌】（後書き）

今回はレイヤ達の活躍が0でした。新たにユーリが入ったので、これからは難しいです。

毎回書いていますが、この後書き見てもらってるのかな？……そんなこと気にせずに

次回予告 他国との戦争が始まり、ダンはある任務を任される。その内容に乗り気になれず、悩むダンそして、次はレイヤ達の出番があるのか？

第10話【戦いと別れと再開】（前書き）

久しぶりの投稿です。遅くてすみません。次がいつかは分かりませんが、取り敢えずどうぞ（＾o＾）ノ

第10話【戦いと別れと再開】

トレヴィル公の館は何時に無く騒然としていた。

「これまた皆さん慌ててるねえ」

「戦争なのだから当然だ。この状況で落ち着いている貴様がおかしい」

「……そうかもな。それはいいとして、お前ここに来て大丈夫なのか？トレヴィル公と敵対関係していたみたいだったけど」

話している間に、もうトレヴィル公の部屋の前まで来ちゃったよ。問題はユーリをどうすつかだよな。面倒事にしたくないし、ただど

「それに関しては心配するな。既に手は打ってある」

そう言って、ニヤリと笑うとユーリ。

「どづいづことだ？」

「フッフッフッ、こんなこともあるつかと思って持ってきたのだ。見るがいい！テッテレテッテッテッ 透明マント」

「なっ、なんだって……っ！？」

どっかで聞いたことのあるような音楽と共にユーリが出したのは、まさかの透明マントだった。ユーリ恐ろしい子。

「じゃなくって、何でお前が“それ”持つてるんだよ!？」

「それは、秘密事項だ」

そう言われたら逆に気になるんだけど、その透明マン〇。だけどころ以上、聞くのは何故かいけない気がしたので、おとなしく引き下がる。

「はあ。それじゃあ、トレヴィル公に挨拶と行きますか、ユーリ、ちゃんと隠れてるよ」

「無論だ」

て、早っ!?!もう消えてんのかよ。なら、早速入るとしますか。

部屋に入ると、そこには大量の書類と格闘しているトレヴィル公の姿があった。大変そうである。

「おーい、来たぞ」

「んっ?何の様かしら、ダルタニヤン」

声を掛けると、ようやくこっちに気付いた様子でペンをテーブル置くトレヴィル公。そういえば久しぶりに聞いたなダルタニヤン。周りからはダンとしか呼ばれなかったからすっかり忘れていた。

「トレヴィル公、いったいどういつもりだ?」

若干、強めの口調で問う。今回ここに来たのは、当然のことな

がら、俺にさせようとしている任務のことである。

「どういうつもりとは、何かしら？任務のことなら既に了承したと聞いているけど」

「脅迫されなければ、断るつもりだったが」

俺に命じられた任務は何を隠そう、初撃の部隊の隊長である。要は一番危険な部隊ということだ。

「こっちは人手不足なのよ、だから仕方なく腕のある貴方を選んだ。聞いているわよ、あのロシユフォールに勝ったこと、今更辞退は認めないわよ」

「……………チツ」

なんだろう、今もう一つ舌打ちが聞こえた気がしたんだが気のせいかな？うん気のせいだ。

「貴方の部隊は既に中庭にいるから今の内に会っておきなさい」

「くそっ、了解した」

トレヴィル公の言葉に返事をして、部屋を出る。全くもって忌々しい。

イライラしながら部屋を出ると。どうしてかレイヤ、ティファ、イリスの三人がいた。

「よっ、お前らも中に用事か？」

「それもあるけど、それはついで」

「そうそう、一番の用事はアンタよ」

「ダン、ロシユフォールと決闘するとき剣使ったよ ね？だから前は邪魔が入ってできなかったから今度こそ勝負！という訳」

順にレイヤ、ティファ、イリスと答える。つて、おいおいマジですか？勘弁してほしい。ユーリと殺りあった時でも死ぬほど疲れたのに、三人を相手なんて無理！

「わ、わるい。でも剣はもう使わないって決めてるんだ。前は緊急だったから仕方なかった。だからみんなの要望には答えられない。」

「……本当にすまない」

「……そうだったのか？」

三人に頭を下げる中、見えないが横でユーリが呟いているようだか、そうなのだ。ユーリの時は仕方なかった。俺がやらなければいけなかったんだ。だからあの時は、己を曲げて剣を取った。これからまた使うつつもりはない。

「」「」「……」「」「」

三人は無言、顔を上げられない。もう言った方がいいのか？もう言わなければいけないのか！散々悩んだ末俺は思いきって頭を上げる。

「……この戦争が終わったら、俺の全てを話す。だから今は……」

「……分かったわ」

俺の話を遮り、レイヤが口を開いた。

「私も嫌がる相手と戦いたいと思わないから、今は我慢する」

レイヤに続きティファが言う。しかし“今は”とはどういふこと
でしょう。

「そうだね、今は目の前のことを片付けてからにしよう、決闘やダ
ンのことはそれからだね」

最後に閉めるように、イリヤが答える。

「……ありがとう」

そう言って再び頭を下げる。何か涙が出そう。こいつらと知り合
えて本当に良かった。

「もう、何回も頭を下げない！戦争が終わったらちゃんと聞かせて
もらうんだから」

「ああ、分かった」

「それじゃあ私達も中に入りましょう。ダンお互いに死なないこと
を祈るわ」

レイヤの言葉で話は終わり、最後までこちらに手を振るイリヤを
見送る。

(何故か死亡フラグをたてた気がする。「俺、この戦争が終わったらいっつに告白するんだ」的な事を言ったよな。いつそのこと逃げ出そうか)

「ふう、話せないのもなかなか辛いな」

三人が中に入ったと同時に、ユーリが姿を表す。お疲れ様です。

俺も自分のやることを成すため、扉に背を向けて歩き出す。行き先は俺の部隊が居るであろう中庭だ。

「……………」

「……………」

「何故お前がいる!」「どうして貴方がおりますの!」

中庭についた俺はある人物と再開を果たしていた。既に殆どの人から忘れられているだろうが、俺とレイヤ達との決闘の途中に出てきた、あのジュサク隊長である。いましたねー、そんな奴。俺も会うまですっかり忘れていた。それはともかく、何故俺の部隊にこいつがいるんだ? ついでだが、ユーリは透明マントで隠れて俺の横に居る、はず。

「と、取り敢えずお互いに落ち着いて話そうか」

「そ、そうですね」

「様お互いに落ち着くと、何故ここに居るか話すこととなった。なにも、ジュサック隊長は俺達に負けた事が原因でクビになったらしく、仕方なくトレヴィル公の元で働くこととなったり、今は只の銃士らしい。つまり、元隊長だ。」

「あー、なんか、すまん」

「ど、同情なんかいきりませんわ!」

「でしょうね。俺も同じ立場ならされたくない。その原因の元の奴からなら尚更だ。」

「私の事はいいのです!それより、何故貴方がここに居るのですか」
「!」

「俺か?俺はここの隊長だけだ」

俺の立場を告げると、ジュサックは固まってしまった。まあ、当然だろう。なにせ部隊の隊長相手に生意気と言っている程の口をきいたのだから。特に俺は気にしないが、他の所ならただでは済まないだろう。

「おい固まん。別に俺はそんなの気にしないから、お前らも気軽に話しかけていいからな」

ジュサックの後ろに居る女銃士達にも声を掛けると何故かキヤ

ーと黄色い歓声が返ってきた。女はミステリー。

「まっ、そう言うわけだから、改めてよろしく。ダンって呼んでくれ」

「……ルシル・ジュサックですわ」

差し出された右手をぎこちない動作で握るジュサック改めルシル。うん、それでよろしい。

その後も部隊の全員に一人ずつ挨拶をしていくが全員のテンションが以上に高く中には握手しただけで気絶する娘まで出てきた。何でだろうね？

しかし、戦争の前なのに元気なのは良い事だ。この部隊でなら大丈夫だ。

(やっつやるわー！)

第10話【戦いと別れと再開】（後書き）

毎回このような駄作にお付き合いしている方は有り難うございます。原作ブレイクしすぎましたね。あと途中の話も大分とばしています。申し訳ないの一言です。

それにしても再び出てきましたねジュサク隊長改めルシルさん。作者自身再び出すつもりはなかったのですが、何故か出してしまいました。しかし、キャラが増えていくと段々と誰か分からなくなりますね。そこは作者の力不足です。

それでは次回予告　ついに始まった戦争。相手国はイギリス。先陣で戦う事となるダンは生き残れるのか！？

【突撃と暴走と停止】（前書き）

皆さんお久しぶりぶりです。この小説を覚えている人はいるのでし
ようかと心配な作者です。時間があつたので投稿してみました。相
変わらず短いです。

【突撃と暴走と停止】

場所と時間と過程を全て吹っ飛ばして、只今俺は、戦場のど真ん中にいる。飛ばしすぎだと思われるがそこはかくかくしかじかと言うことで、決して作者が手を抜いたわけではないことを先に言っておこう。

そこで俺は

「おらああああ!!」

『ぐはっ……!!』

「その心臓もらい受ける!!」

『がはっ!!』

「悲しいけどこれ、戦争なのよねっ」

『ぎゃああああ!!』

無双していた。(ユーリは陣地でお留守番 だ)

手には極太の槍を携え少し前にできたストレス解消のため、片っ端から敵を尻ぎ払っていく。まったくもって爽快である。人殺して大丈夫? テンションMAXだから気にしない。気にならない。

「あ、あの本当にダン隊長ですわよね? 私には前と比べて別人のように見えるのですが……」

「H A H A H A ～それは気のせいだZ E ……おらっ！……むしろこっちが素と言っても過言ではないさ」

ルシルに返事をしながらも手は止まらない、やめられない。とまらない。それはともかく、現在俺が率いてきた隊。総勢100名は誰かの影響を受けたらしく、ルシル以外の全員がバーサーカー状態になっており、その暴走状態のおかげなのか、敵の前線をたった100人で押していた。味方？知らんがな。まだ後ろじゃね？俺達、半ば独断先行したようなものだし、そのうち来るでしょ。

「はあ………そうですの………」

それで一樣納得したらしくルシルは改めて表情を引き締め、目の前の敵に向き直る。その立ち振舞いは流石、過去に護衛士隊の隊長を勤めていただけあって、その腕前は中々のものであった。前戦つたときは、俺の武器が大根だったこともあり、油断していたこともあって楽に勝てたが、次戦うことになったら、そう簡単にはいかないだらう。

取り敢えずそれは置いといて、そろそろ引き際だろう。隊としての役目は十分に果たしたし、これ以上は体力的に危険だ。味方もようやく動き始めたみたいだし。

「ダン隊！敵を牽制しつつ後退だ！」

『了解！！！！』

俺の命令により部隊が下がっていくのを確認し、では俺も下がろうかな～と思ったのだが……

「あり？」

現状が理解できずもう一度周囲を確認……………確認完了。

「ふっ、どうやら俺だけ置いてかれてしまっただな」

無駄に格好つけて言ってみるが、それで状況が変わるはずもなく、俺の部隊は既に味方の所まで後退していた。って、皆さんちよつと速くね！と言うより酷くね！俺、一樣隊長のはずなのに、あれ？何だか汗で前が見えないよ。いつの間にか敵に囲まれているし。

「フッフッフ……………いいだろう。いいでしょう。やってやるよ、やってやるうじやないか！行くぞ貴様ら！兵の貯蔵は充分か！」

闘争本能剥き出しにして、敵が密集している箇所突っ込んでいく。その時の俺を表現するなら、猛獣？いや違うな、この場合は鬼と言った方がしっくり来るだろう。槍を振るい集まってくる敵を吹き飛ばし、馬に乗った相手には心臓に向けて槍を突き刺す。逃げるなんて考えは初めからなかった。いや忘れていただけかもしれない。敵の槍をもう一本奪い取り、二本の槍を使って群がる敵を殲滅していく、敵が警戒して近づかなくなっていけば、敵の馬に跨がり敵陣に向けて駆けていく。その時俺は冷静さがなかった。だから気付かなかったのかもしれない。いや冷静だったとしても分からなかっただろう。戦場の中で俺に狙いを定めていた1つの銃に……………

その瞬間、戦場に1つの銃声が轟いた。その瞬間だけ時が止まった感じがした。目の前にはゆっくりとこちらに向かって来る弾丸が見える。だがそれを避ける術は俺にない。ただスローなだけで体は一ミリも動かせない。弾丸は吸い込まれるように俺の左胸に向か

つて来る。

止まっていた時間が加速する。弾丸は外されることなく俺の左胸に命中した。だが咄嗟に体を捻ったのがよかったのか弾丸は心臓から外れたらしく。俺はまだ生きていた。それでも弾丸は俺の左肺を貫いたらしく呼吸が苦しい。息を吐くと血が溢れてくる。左腕の力が抜け片方の槍が落ちる。そこからバランスが崩れ馬から転げ落ちてしまう。身体中刀傷や泥、返り血と俺の血だらけでぼろぼろである。

(……だがまだ俺は生きている)

みんなと約束をした。だからまだ死ねない。生き残るために、俺は右手に残った槍を握り締め、活路を開くべく、味方の方へ一直線に突っ込んでいく。初めからこうすればよかったと悔やみつつも俺はただ前へ走り続ける。体は所々切り裂かれ、左胸からは血が溢れ、体が鉛のように重い。だがまだ走れる。一本の槍となって突き進んで行く。

どれくらい走ったのかは分からない。いつの間にか敵陣を抜けていた。少し先には手を振るダン隊とユーリの姿が見える。が、そこまでが限界だった。安心した瞬間体から一気に力が抜け倒れていく。ユーリとルシル達が血相を変えて近づいて来る姿が見えたが、そこまでだった。

(みんな……ごめん……約束守れそうにないや……)

次第に薄れていく意識の中で俺はそう思うことしか出来なかった。

俺の鼓動が止まった音がした……

【突撃と暴走と停止】（後書き）

これで終わりじゃありませんよ。ちゃんと続きはあります。まあ、
亀更新なのでいつになるか分かりませんが……

次回予告（懐かしい〜） 戦いの中でその命を落としたダン。
だが彼は目覚める。そして彼は知ることとなる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0327v/>

乙女三銃士

2011年10月9日03時54分発行